

標準（高地）ドイツ語知識に基づく低地ドイツ語理解： 非母語話者を被験者とするケーススタディ

上田 直輝（言語文化専攻博士前期課程2年）

1. はじめに

低地ドイツ語（英：Low German；独：Niederdeutsch）と呼ばれる言語変種の地位はいまだ言語学者の間で不確定で、独立した個別言語（便宜的理由から以下「言語」とされることもあればドイツ語の方言とされることもある。そのため「低地ドイツ語」という日本語表現は必ずしも適切ではないが、本発表では便宜上この呼称を用いることとする。その地位をめぐる議論の争点の一つとしては、第二次子音推移という音韻転換現象の影響を受けていない低地ドイツ語と影響を受けている高地ドイツ語の間の言語構造的隔絶の大きさが挙げられる。なお、これら2変種は通時的な観点ではこの現象の影響を受けたか否かに基づいて大陸西ゲルマン語の異なる方言として袂を分かったものである。

ある2変種間の言語構造的隔絶が大きい、すなわち2変種が構造的に大きく異なっていると見なされるとき、それらは隔絶言語と呼ばれ、またこの基準は隔絶基準と呼ばれるが、隔絶基準に基づいた議論で2変種間の相互理解性を考慮すべきかどうかという点で意見が分かれている。筆者はこのうち相互理解性を考慮する立場から出発し、「DaF 学習者ならびドイツ語母語話者は低地ドイツ語をどのように理解するのか」を問うアンケート調査を実施した。なお、DaF はドイツ語表現 “Deutsch als Fremdsprache” の略称で「外国語としてのドイツ語」を意味し、DaF の授業で学ばれているのは高地ドイツ語に基づいて形成された（高地）ドイツ語の標準変種である。また、母語話者を引き合いに出す目的は、彼らの理解可能性を把握することと、DaF 学習者の結果と比較することである。そして、本研究にとって重要な「なぜ非母語話者の理解性を扱うのか」については後述する。

上述の隔絶基準に基づいた低地ドイツ語の地位をめぐる議論に貢献することが本研究の第一目的であるが、それに加えて「どの低地ドイツ語単語が母語話者／DaF 学習者にとって理解するのが容易／困難なのか」を明らかにすることで、実際にドイツ北部で行われている低地ドイツ語教育にも貢献したいと考えている。

2. 隔絶基準における相互理解性

「隔絶基準で相互理解性を考慮するべきかどうか」という論点について反対の立場をとる研究者としては Kloss や Agard、Goossens や Mellado & Buján が挙げられ、たとえば Kloss (1978: 64-65) は理解性が話し相手・会話内容・個人の才能や経験などに左右されることに言及している。また、Agard (1971: 6-7, 20) は言語外的な諸要因の関与ゆえ 2 変種間に相互理解性が成立しているかどうかを客観的に述べることはできないこと、さらに理解性が必ずしも対称的ではないことを根拠として、独立言語性と理解性の間に結び付きはなく、せいぜい可能性を示唆するだけであると主張している。そのほか Goossens (1977: 38-39) は個人の才能やコード切換えへの慣れが大きく影響することを理由として相互理解性の導入に反対し、Mellado & Buján (2005: 135) は話者の教育レベルや言語能力、そして理解する意志が関与するため理解性基準は恣意的だと述べている。

これらの研究者に対して Haugen や Trudgill、Gooskens や Tang & van Heuven、Ammon は先述の論点について（比較的）賛成の立場をとっている。しかしながら、Haugen (1966: 926) と Trudgill (2000: 4) は相互理解性と言語・方言区分の相関性について懐疑的であると明言しており、前者はこの基準が不確かなものだ指摘し、後者は政治的・文化的要因の方が相互理解性など言語構造的な要因よりも重要だと述べている。その一方で、Gooskens (2018: 206) は相互理解性についてより肯定的な評価を下している。彼女は隔絶言語を語るべき理解度と語るべきでない理解度の線引きが困難であると認めつつも、相互理解性は言語・方言の区分において標準的な、あるいは少なくとも第一の基準になっていると述べている。また、Tang & van Heuven (2009: 711) は相互理解性を言語学的な銘々の次元（音韻・統語・語彙など）の相対的な重要性を示す総合的な基準として扱っており、同様に Ammon (1989: 37) も現時点において相互理解性を問うテストは適用が比較的容易であるとその利点に言及している。

3. 低地ドイツ語と高地ドイツ語の間の言語構造的隔絶

低地ドイツ語はときに独立した個別言語、ときにドイツ語の方言だと主張されてきたが、低地ドイツ語は個別言語であるとの見解を支持する研究者の中でも主張の根拠は多様であり、またこのことは低地ドイツ語を方言と見なす研究者にも当てはまる。どちらの見解を支持するのかは第一に「どの基準に基づくのか」という点に左右されるが、同一あるいは類似した基準に基づいたとしても最終的な結論が同一とは限らず、高地ドイツ語と低地ドイツ語の間の構造的隔絶についての評価はまさにこの例である。これら 2 変種の間の

隔絶について Kloss (1978) や Menke (1993)¹、Mellado & Buján (2005) は低地ドイツ語を隔絶言語と見なすほど大きいと捉えているのに対し、Menge (1995) や Goossens (1977; 1983) は高地ドイツ語変種と低地ドイツ語変種が「ドイツ語」という個別言語に集約されるほど 2 変種間の構造的隔絶は小さいと判断している。そして、この点については既に Kellermeier-Rehbein (2014: 65) が「簡潔に言えば、低地ドイツ語の言語あるいは方言としての地位は、比較対象の変種との間の言語的距離に関する多かれ少なかれ主観的な判断による (筆者訳)」と指摘しており、同様に Herrmann-Winter (1994: 457) も言語変種の地位に主観的な判断が関与するということについては一般的にコンセンサスが得られていると述べている。この関連で筆者が指摘したいのは、低地ドイツ語の地位に言及する研究者は言語的距離すなわち言語構造的な (非) 類似性だけでなく 2 変種間の理解可能性についても何らかのイメージをもっていると考えられるが、彼らの多くは 2 変種のうち一方を母語としていると予想され、また彼ら研究者は一般的なドイツ語母語話者よりも 2 変種に精通していると考えられることである。本発表が提示する母語話者による回答は、彼ら専門家がもつ 2 変種間の相互理解性についてのイメージが一般のドイツ語母語話者の理解可能性と乖離していないかどうかを確認できるという点でも価値があるように思われる。

4. 非母語話者を被験者とする調査の意義

DaF 学習者、つまり非母語話者を被験者とする意義とは、逆にいえば「母語話者を被験者としない意義」である。本研究にとって重要な概念として、理解性研究で用いられる inherent intelligibility と acquired intelligibility がある。前者が出発変種 (= 被験者が使える変種) と理解対象変種との構造的類似性のみに基づく理解性であるのに対して、後者はそれに加えて被験者の対象変種との事前の接触・学習経験などを前提とする理解性である。また本検証の理論的枠組みにとって、理解性研究で述べられてきた以下 2 つの主張は重要である。一つ目は「ある個別言語について、その標準変種と方言の双方を話す者は標準変種のみ話者に比べ、その個別言語と類縁関係にある他言語をより高い精度で理解することができる」という主張である。この仮説はたとえば Berthele (2008) に見られ、彼はドイツ語圏スイスの学生を被験者としてオランダ語・スウェーデン語・ノルウェー語に対する理解可能性を追究する実験を実施し、この仮説通りの結果となった。そ

¹ Menke (1993) の見解については Menge (1995: 40) による。

して二つ目は、Gooskens & Swarte (2017: 125)による「近縁関係にある2つの言語に関していえば、ごく僅かな接触経験や、話者にそれら言語間の相違点ならび類似点を意識させるような短期間の語学コースでさえ相互理解性を著しく向上させることが既存研究からわかっている（筆者訳）」との主張である。

ドイツ語圏在住のドイツ語母語話者の多くは多かれ少なかれ低地ドイツ語や部分的にその特徴を伴う高地ドイツ語変種を耳にしたことがあると推測されるため、上記の2つの主張に基づけば、彼らを被験者として確認する高地ドイツ語から低地ドイツ語への理解性は *acquired intelligibility* である可能性が高いといえることができる。本研究が DaF 学習者を被験者とするのは、DaF 学習者が母語話者に比べてドイツ語方言・低地ドイツ語に関する知識をもたないと考えられ、したがってより *inherent intelligibility* に近い理解性を扱うことができると考えるためである。また、DaF 学習者の中でも日本人は2つの観点から本調査に適している。まず言語的な観点では、本調査において DaF 学習者の母語である日本語はヨーロッパ系言語と比べて干渉要素になりにくいといえることができる。さらに社会的な観点としては、日本でドイツ語を耳にする機会は一般には稀であり、それゆえ DaF 学習者の言語能力のうち調査に関与しうる変種が「(高地) ドイツ語ならび英語の標準変種 (+ α)」といった具合に比較的均一的だと想定されることである。

5. 調査方法

調査は Google フォームを用い、実現可能性などの事情から書かれた低地ドイツ語に対する理解を扱った。なお、低地ドイツ語は統一的な正書法をもたないため、本調査ではそこで用いられている綴りが北ドイツ全土で理解されると謳っている低地ドイツ語の教科書 “Platt - dat Lehrbook: Ein Sprachkurs für Erwachsene [Low German - the textbook: A language course for adults]” の変種を用いることとした。被験者はドイツ語母語話者・DaF 学習者ともに大学生・大学院生を中心としているが、後者については社会人も若干名参加しており、10月16日の時点では母語話者80名、DaF 学習者36名が回答し、うち本研究で有効回答と見なされるのはそれぞれ79名、32名の回答である。残念なことに、後者32名のうちドイツ語圏滞在経験がまったくない被験者はわずか6名であったが、残りの26名の理解性は母語話者のそれに比べれば *inherent intelligibility* により近い理解性だと考えられるため、彼らの回答結果に着目することには一定程度の意義があると考えられる。また、本発表では紙面の都合上、本調査の設問すべての結果を扱

うことができないため、以下では本発表で結果報告を行う「設問A：文脈を伴わない語彙認識」の方法論にのみ言及する。

設問Aでは計40の低地ドイツ語の単語を提示し、被験者の課題はそれらを標準ドイツ語あるいは日本語に翻訳することである。40語の内訳は、20の動詞とそれ以外の20語だが（詳細は表1）、後者の20語のうち大半は独立して形容詞・副詞・前置詞などとして機能しつつ、接頭辞として動詞や名詞の形成にも関与するものである。これらは先述の教材の語彙リストに掲載されたとして機能する語のうち、高地ドイツ語において対応するものと異形のもの全てである。また動詞については三つの段階を経て選出した。第一段階として、先述の教科書の語彙リスト、INS (Institut für niederdeutsche Sprache [Institute for Low German language]) が公開している初等教育で学ぶべき語彙リスト、理解性研究でよく用いられる Swadesh list の計3つのリストすべてに含まれており、かつ（高地）ドイツ語の対応語と綴りが異なるものという条件で30語を抽出した。第二段階としてそこに4つの重要語彙（（高地）ドイツ語でいう haben, werden, sein, lassen に対応）を加えて34語とし、第三段階ではそれら34語と対応する（高地）ドイツ語語彙を比較、綴りにおける相違などに基づいて20語に絞り込んだ。なお、動詞と接頭辞を中心に出题したのは、本研究が低地ドイツ語教育への貢献を視野に入れており、低地ドイツ語では（高地）ドイツ語と同様、接頭辞+動詞からなる派生動詞が豊富なためである。

6. 調査結果

紙面の都合上すべての設問語彙の結果にひとつひとつ言及することはできないため、ここでは全体的なことにのみ言及し、詳細な結果は下記の表1を参照されたい。まずドイツ語母語話者ならび DaF 学習者の平均得点率（全40問のため、正答1問あたり2.5%）について、前者の平均得点率は44.83%で後者が51.33%となり、本研究の立てた仮説とは異なる結果になった。ただし、誤答および非回答の割合に目を向けると、母語話者と DaF 学習者の誤答率はそれぞれ21.96%と23.95%であり、また非回答率は33.10%と24.26%であった。つまり、回答した設問については母語話者の方が僅差であるがより高い割合で正答している一方で、母語話者はそもそも回答を記入していない設問が DaF 学習者より多い。ここで疑問なのは、母語話者が回答していない設問について、相当する（高地）ドイツ語の語彙が本当に一つも思いつかなかったのか、あるいは思いつく語彙の量が多すぎて選択できなかったのかということである。本研究ではこの問題を掘り下げることができないもの

の、しかし基本的に母語話者は DaF 学習者より多くのドイツ語語彙知識をもっていると予想されるため、筆者が推測するに後者の理由による非回答が多いのではないかと考えられる。また、母語話者よりも DaF 学習者の方が平均得点率が高かったことに関してだが、そもそも本設問では「DaF 学習者が知っていると予想される語彙」が正解になるような低地ドイツ語語彙が出題されているため、より多くの語を知っている被験者ほど多くの語を連想してしまい、より頭を悩ませることになる。つまり、本調査において有利なのは正解の 40 語を知っており、かつその他の語彙知識に乏しい人々である。全体的に DaF 学習者の方がより高い割合で正答していることには、この点も関与した可能性がある。

各語の正答率についていえば、母語話者と DaF 学習者の正答率で大きな差がついた語彙が複数見られた（詳細は表 1）。上記の理由から DaF 学習者が有利であることを踏まえると、特に注目すべきは母語話者の正答率が DaF 学習者を上回っている設問である。また、それぞれの語によって正答率が大きく異なることも見て取ることができ、低地ドイツ語教育の際には、正答率の低い語彙に特に注意を払って指導することが望ましいと考えられる。

表 1 出題語彙一覧とドイツ語母語話者・DaF 学習者による正答率

出題語彙（模範解答）	正答率（％）		出題語彙（模範解答）	正答率（％）	
	母語	DaF		母語	DaF
1. seggen (sagen)	81.3	30.4	2. för (für)	100.0	86.1
3. liggen (liegen)	87.5	81.6	4. to (zu)	87.5	60.1
5. bi (bei)	68.8	34.2	6. dörch (durch)	96.9	70.9
7. sien (sein)	59.4	54.4	8. wieder (weiter)	3.1	1.3
9. geven (geben)	100.0	87.3	10. trüch (zurück)	6.3	5.1
11. över (über)	92.2	92.4	12. inladen (einladen)	71.9	82.3
13. weten (wissen)	6.3	8.9	14. swümmen (schwimmen)	84.4	95.6
15. fasthollen (festhalten)	34.6	48.1	16. achter (hinten)	3.1	8.9

17. flegen (fliegen)	90.6	53.2	18. ünner (unter)	28.1	22.8
19. vun (von)	68.8	81.0	20. ut (aus)	12.5	20.3
21. dreihen (drehen)	51.9	41.8	22. drinken (trinken)	100.0	93.7
23. üm (um)	78.1	60.1	24. af (ab)	6.3	12.7
25. tellen (zählen)	3.3	1.3	26. laten (lassen)	6.3	17.7
27. snieden (schneiden)	85.9	68.4	28. rüken (riechen)	0.0	3.8
29. vör (vor)	84.4	42.4	30. wedder (wieder)	21.9	25.9
31. lopen (laufen)	9.4	27.8	32. op (auf)	6.3	65.2
33. binnen (binden)	18.8	3.8	34. breken (brechen)	56.3	59.5
35. slapen (schlafen)	46.9	54.4	36. slaan (schlagen)	6.9	7.6
37. tosamen (zusammen)	62.5	63.3	38. na (nach)	21.9	10.1
39. kamen (kommen)	93.8	45.6	40. stahn (stehen)	87.5	63.3

参考文献

Agard, F. B. (1971). Language and dialect: Some tentative postulates.

Linguistics, 65, 5-24.

Ammon, U. (1989). Towards a descriptive framework for the status/function

(social position) of a language within a country. In: Ammon, U. (ed.).

Status and function of languages and language varieties. Berlin et al.: de

Gruyter, 21-106.

Arbatzat, H. (2019). *Platt - dat Lehrbook: Ein Sprachkurs für Erwachsene*. ed. by

Institut für niederdeutsche Sprache. 2. edition. Hamburg: Quickborn-Verlag.

Berthele, R. (2008). Dialekt-Standard Situationen als embryonale

Mehrsprachigkeit: Erkenntnisse zum interlingualen Potenzial des

Provinzlerdaseins. *Sociolinguistica*, 22, 87-107.

Gooskens, C. (2018). Dialect intelligibility. In: Boberg, C., Nerbonne, J. &

Watt, D. (eds.). *The handbook of dialectology*. Hoboken: Blackwell, 204-218.

- Gooskens, C. & Swarte, F. (2017). Linguistic and extra-linguistic predictors of mutual intelligibility between Germanic languages. *Nordic Journal of Linguistics*, 40/2, 123-147.
- Goossens, J. (1977). *Deutsche Dialektologie*. Berlin et al.: de Gruyter.
- Goossens, J. (1983). Niederdeutsche Sprache: Versuch einer Definition. In: Goossens, J. (ed.). *Niederdeutsch: Sprache und Literatur: Eine Einführung*, vol. 1. 2. edition. Neumünster: Karl Wachholtz, 9-27.
- Haugen, E. (1966). Dialect, language, nation. *American Anthropolologist*, 68/4, 922-935.
- Herrmann-Winter, R. (1994). „Der Dialekt erlaubt keine eigene Sprache, aber eine eigene Stimme...“ In: Mattheier, K. & Wiesinger, P. (eds.). *Dialektologie des Deutschen: Forschungsstand und Entwicklungstendenzen*. Tübingen: Niemeyer, 457-464.
- Kellermeier-Rehbein, B. (2014). *Plurizentrik: Einführung in die nationalen Varietäten des Deutschen*. Berlin: Erich Schmidt.
- Kloss, H. (1978). *Die Entwicklung neuer germanischer Kultursprachen seit 1800*. 2. edition. Düsseldorf: Schwann.
- Mellado, C. & Buján, P. (2005). El estatus del bajo alemán como “lengua regional” [The status of the Low German as “regional language”]. *Revista de Filología Alemana*, 28, 129-142.
- Menge, H. H. (1995). Rehabilitierung des Niederdeutschen: Erwartungen an die europäische Sprachenpolitik. *Zeitschrift für germanistische Linguistik*, 23, 33-52.
- Menke, H. (1993). Gutachtliche Äußerung zu der Frage, ob die niederdeutsche Sprache eine Sprache im Sinne der Europäischen Charta der Regional- oder Minderheitensprachen ist. Kiel, 30. November 1993.
- Tang, C. & Heuven, V. J. van (2009). Mutual intelligibility of Chinese dialects experimentally tested. *Lingua*, 119, 709-732.
- Trudgill, P. (2000). *Sociolinguistics: An introduction to language and society*. 4. edition. London: Penguin.